

ikeeco

2026
vol.49

“住む人が主役の家づくり”に、もっとファンを！

木のマンションリノベーション

住まい手に寄り添う、 心地よさの進化形

特集

ドイツ・オーストリア・スイス
第28回 エコバウ建築ツアー 2025
視察レポート

木繊維断熱材シュタイコや国産材など、自然素材を生かした“木のマンションリノベーション”で知られる、マスタープラン/小谷和也設計室の小谷和也さん。
小谷さんのもとには、シングルや二人暮らし世帯からのリノベーション相談が多く寄せられ、60㎡前後の物件も多いという。これまでの経験からも「そのくらいの規模でも十分快適な住まいを造れる」と感じているようだ。
今回は、築60年のマンションを、住まい手との対話から大胆に再構築し、“心地よさ”をいっそう高めた最新事例を紹介する。

小さな空間に大きなゆとりを生む設計

今回のリノベーションの舞台は、築60年になる眺望の良い64㎡のマンション。過去最高の猛暑となったこの夏、Kさん夫妻はこの新居で快適な室内環境を実感したという。

この住まいでは、木繊維断熱材の持つ多孔質な性質を、無垢材や自然素材が包み込むことで、温度・湿度のムラが少ない“やわらかな空気”が生まれている。

北側の玄関から入ると、無垢材とガラスで構成された間仕切りが外部からの空気を遮断。そして、すぐ左手にベッドルーム、右手に「3 in 1」のバスルーム（洗面・浴室・トイレ）を配置。

「スペースを取る廊下をなくすという合理的な間取りを海外住まいの長いご夫婦がすんなり受け入れてくれたおかげで、リビングを広々と取ることができました」と小谷さん。このホテルライクなレイアウトが、奥へと続く空間にゆとりをもたらした。

寝室から廊下を抜けた先には、アイランドキッチンとリビング、ダイニング。アイランドキッチン横の収納には、目立たぬよう食洗機、スチームオープンなどと一緒にドラム式洗濯機がビルト

イン。まるでホテルのような清潔感と生活動線の良さを両立している。南側には阪神間の海を見渡すパノラマが広がる。

最上階ゆえの夏場の熱対策として、天井には200mmのシュタイコゼルを吹き込んだ。築年数の古い建物で低いところでは天井高は1900mmしかないが、住み始めると圧迫感を感じないという。

「図面で見た時は狭く感じるかと思いますが、実際に暮らしてみると全く窮屈ではありません」と語る、身長180cmのKさん。

たとえばベッドルーム入口の折り畳みチェア、ダイニングや小上がりに造作されたデスク前の畳スペースなど、それぞれの「座る場所」に異なる風景と光がある。

南側から見ても、リビング・小上がり・寝室が緩やかにつながり、高さや視線の抜けが「体感的な広さ」をつくり出している。コンパクトながらも、どこにいても外とつながるような開放感が、この住まいの魅力だ。

photo:hirofumi imanishi





Kazuya Kotani 小谷 和也

マスタープラン／小谷和也設計室 代表
<https://reno.mpl.co.jp>



1975年生まれ。国産材の注文住宅を手掛ける地場工務店にて木の家の設計に取り組む中で、自身は戸建に住んだことのない団地世代であり、土地価格に予算のほとんどを取られる都市部での注文住宅の理想と現実とジレンマを感じる。2006年に独立後、中古マンションに国産材を使った木の空間に変える『木のマンションリノベーション』を提唱。無垢材を床に使う際の遮音性能確保やマンション特有の結露、カビ対策、断熱改修にも取り組み、関西、関東で幅広く設計活動や講演、社内研修などを行っている。近年はデンマークを中心とした北欧家具コレクター、また、たためる家具収集家として執筆活動も行う。オリジナルデザインのたためる家具や雑貨、建材も開発中。

受賞歴 第2回 日本エコハウス大賞 リノベーション部門賞「東大阪の家」
 第36回 住まいのリフォームコンクール 国土交通大臣賞「浦和の家」
 第39回 住まいのリフォームコンクール 優秀賞「覚王山の家」、など

著 書 「リノベで暮らしを変える 間取りのレシピ100」(エクスナレッジ) 好評発売中!



これまでの家が“当たり前”ではなかったという気づき

仕事の関係で約20年間、4カ国での海外在住経験を経ることとなったKさん夫妻。特にドイツでの滞在が長く、冬は日本より気温が低くなるのに、一軒家でもアパートでも室内は薄着で快適に過ごしていた。そこから、日本の住宅の冬の寒さや結露の問題が、他の国では当たり前ではないことに気付く。

当時の日本の住まいでも同様の居心地を求めハウスメーカーなどを訪問したが、設備・建材の追加コストばかりが増え、家全体の室内環境を整える提案にはなかなか出会えなかったという。そんな折、スペインでのロックダウン

中に自宅で動画を見ていた奥さまが、小谷さんの設計思想に触れ、直感的に問い合わせた。

Kさん夫妻が以前の住まいの半分ほどの広さしかない、木のマンションリノベーションに行き着いたのは、長年の生活を通して育まれた“暮らしの価値観”の変化によるものも大きい。一定期間を過ごす、次の赴任先へ。その繰り返し、本当に自分たちにとって必要な「もの」や「道具」を明らかにしていくこととなる。ヨーロッパでは室内温度や湿度にムラがほとんどないため、布団を干す必要がない。洗濯物

を外に干す文化がなく、室内からの視界を長期的に遮る物干しや、そのための広いベランダも要らない。食洗機があると、キッチンの大きなシンクも不要だった。

そうやって、道具やスペースは最低限に絞られていく。それに伴い、住まい手の経験に基づくこうした合理性が、空間の余白を多く生み、設計の自由度を高める要因となった。結果的に、暮らしに必要な荷物も以前の半分くらいに整理され、引っ越しの片付けが半日で済むほどの量になったそうだ。



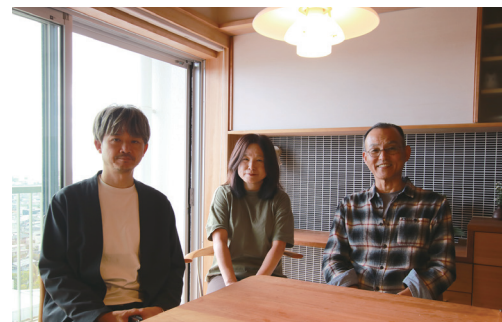


木繊維断熱材シュタイコがもたらす、ムラのない空気質と静けさ

この住まいに取り入れられた小谷さんの新しい試みは、リビングの南側に広がるパノラマをゆっくり楽しめるよう、大きなサッシの目前に造り付けられたシエスタベッドと名付けられたスペース。夏のあいだは、大きな開口のある南側を閉じて日射を遮れば、住まいの中心にある廊下の天井に設置したエアコン1台だけで、どこにいても快適に過ごせたという。

シュタイコセルを吹き込んだ壁・天井に包まれることで、熱・湿度の安定だけでなく、マンションで気になりがちな“音”の問題も大きく改善する。スケルトン時には反響音で声が聞こえづらいほどだった空間が、木繊維断熱材の施工直後から一変。Kさんご本人はギター演奏が趣味だが、「普通に弾いていても隣に音が漏れない安心感がある」と話す。

北側には無垢材とガラスで構成した間仕切りを設置し、冬の冷気をしっかり遮断。もちろん、結露などを心配する必要はない。素材の働きと設計の工夫が、季節を問わない心地よさを支えている。



【取材後記】

「もう慣れましたが、入居した最初の1ヶ月は、どこかリゾートにでも滞在しているような心地よさでした」。

住まい方に対する考えを率直に伝え、建築家からの提案を柔軟に受け入れたKさん夫妻。素材の特性を最大限に生かしながら、温度・湿度・音・光——すべての“空気質”を体感としてデザインした小谷さん。

自然素材が発揮する断熱性能と、室内環境を見直す設計手法によって、新築でなくとも快適な住まいを実現できることを示す好例となった。



第28回 エコバウ建築ツアー2025 木の循環と建築

エコバウ建築ツアー 視察レポート

今年で28回目となるエコバウ建築ツアー。
ドイツ・オーストリア・スイスを訪れ、木材の循環
利用と建築の最前線を視察しました。今年のテーマ
は「木の循環と建築」です。脱炭素社会の実現に
向け、森林資源の適切な活用と木造建築の役割
が改めて注目される中、持続可能な仕組みづくり
の重要性を実感しました。
本紙面では、参加者である株式会社おりなす
設計室 代表取締役 田淵一将様より寄稿いただ
いた内容を元にご報告致します。



記事の全文は、
イケダコーポレーション
公式サイトのコラムから
ご覧いただけます。

寄稿

株式会社おりなす設計室
代表取締役

田淵 一将 氏
(たぶち かずまさ)



1987年鹿児島県生まれ。
設計事務所やハウスメーカーで経験を積み、2019年
に「おりなす設計室」を設立。地域の風土と木の魅力
を活かした高性能住宅を手がけ、2023年に法人化。
鹿児島を拠点に、省エネと快適性が両立する建築を
手がける。



1 日目  ドイツ 2025年10月20日 (月)

木繊維断熱材STEICO本社

木繊維断熱材の環境性能と循環利用の仕組みから
建築における持続可能性の指標を学ぶ

ミュンヘン空港からバスで約30分、最初の訪問先はSTEICO社です。日本では木繊維断熱材で知られる同社は、LVL(単板積層材)などさまざまな木製建材も提供しています。私が以前から気になっていた生産時のCO₂排出量は、木材が貯蔵する量の1/3で、カーボンニュートラルへの貢献が明確に示されていました。EPD認証取得を補助金条件とする欧州の取り組みから、日本との違いも実感しました。実演ではシュタイコゼルの吹き込みが行われ、繊維同士がかみ合う特性や再利用可能である点

も確認できました。今回の訪問を通じて、STEICO社の製品が単なる「断熱材」ではなく、再生可能資源としての木の価値を最大限に引き出すシステムであることを実感しました。環境性能を「感覚」ではなく「数値」で示し、政策とも連動させていく欧州の姿勢は、日本の建築産業がこれから学ぶべき重要なポイントです。素材選定や設計判断にLCAの視点を取り入れることが、今後の建築における新しいスタンダードになっていくと感じました。



2



3



4

1. ブルーマー・レーマン社内観
2. ヒッティサウ村の学校建築群
3. エッグ村の戸建て豪邸ヘーバー邸
4. 木造倉庫建築

1

第28回 エコバウ建築ツアー スケジュール

10/19		出国
10/20	ドイツ 	Munich ・STEICO本社 オフィスビルの見学・吹き込みの実演 ・ウェルカムパーティー
10/21	ドイツ 	Rosenheim近辺 ・パウビオロギー協会IBN ホルガー・ケーニッツ氏講演 ・フロリアン・ナグラ氏実験集合住宅
10/22	オーストリア 	Vorarlberg州 Bregenzerwald地方 Hittisau村 ・ヘルマン・カウフマン氏建築案内 ベザウ村の製材所アルミン・メッツラー社 エッグ村の戸建て豪邸ヘーバー邸 ・若手建築家マティアス・ベア氏建築案内 ヒッティサウ村の学校建築群
10/23	スイス 	Widnau村 Gossau村 ・カーボンポジティブ木造集合住宅 OPENLY ・木造会社ブルーマー・レーマン社
10/24	スイス 	Rupperswil村 ・HAGA本社 ブルッグ旧市街 改修事例見学 ・ロルフ・シュトリッカー氏 ヴィラ村 近自然の森案内
10/25	スイス 	Wetzikon村 ・木造集合住宅 Claywood ・チューリヒ市内 自由時間 ・さよならパーティー
10/26		帰国

2日目 ドイツ 2025年10月21日(火)

パウビオロギー協会IBNと実験集合住宅

自然素材と建築技術の融合で持続可能な住環境を体験

ミュンヘンからローゼンハイムへ移動し、パウビオロギー協会IBNへ。元は平屋の食料品店だった建物を「パウビオロギー(建築生物学)」の考え方に基づいて増築・改修したもので、土・石灰などの循環可能な自然素材の採用、接着剤を用いない木材利用、コントロールされた昼光・高周波・低周波の少ない照明器具など、身体への負荷が少ない住環境を実現しています。パッシブハウス認定の取得や太陽光発電・ペレットストーブの活用など、エネルギー面の取り組みも積極的に行われています。パウビオロギー建築の第一人者ホルガー・ケーニッツ氏の講演では、“(植物化学由来の)再生可能な原料”と“(石油化学由来の)有限な原料”のたどる道筋についてのお話があり、持続可能な建築には成長する資源の循環が不可欠であることを理解しました。

その後、フロリアン・ナグラ氏と合流、集合住宅プロジェクト群を見学し、3棟の同形状の集合住宅はインフラライトコンクリート、木製3層パネル、断熱機能付きレンガの異なる素材で施工され、自然換気で快適な住環境を実現していました。さらに木造集合住宅の実験棟も見学し、日射取得や換気、蓄熱容量の工夫など、素材と設計による環境配慮を体感しました。

5. 最初の訪問先STEICO社
6. 本社で製品の説明を受ける
7. 吹き込み実演の様子

8. ホルガー・ケーニッツ氏による講演
9. 実験集合住宅群
10. 木造集合住宅改善版
11. 元平屋の食料品店だった建物



8



9



10



11



12



13



14

12-13. クルムバッハ村
カウフマン氏設計事例
14. カウフマン氏による
村の案内

3日目 オーストリア 2025年10月22日 (水)

クルムバッハ村と地域木材の学校建築群

地域素材と木造建築の工夫を通じて、
地域社会に根ざす持続可能な建築の可能性を知る

オーストリアのフォアアールベルク州へ移動しブレゲンツ地方へ。クルムバッハ村という、パッシブハウス認定された省エネルギー建築が世界一の密度で建つ地域に到着。ここで木造建築を多く手掛ける世界的建築家ヘルマン・カウフマン氏と合流し、設計事例と村の案内を受けました。この地域は、観光地にありがちな宿泊施設優先ではなく村としての価値を大切にしており、過去に栄えた職人文化「手仕事」が再び注目されています。

カウフマン氏は木の経年変化を考慮した設計や無塗装木外壁の活用にごこだわり、新旧の建物が調和する街並みを実現して

います。「コンクリートを木に置き換えただけではなく、木には独自の言語が必要」と語る言葉には、木造建築への強いこだわりが感じられます。昼食後には約30mのスパンを持つ巨大な木材倉庫建築を見学し、集成材を最小限に抑えた無垢材の梁が並ぶ大空間に圧倒されました。さらにカウフマン氏の祖父の代から続く工務店を訪問し、壁パネルや木造ユニットの製作工場を見学しました。ここでは、木造ユニット建築の施工に必要な大工や窓職人などが地域に揃い、建築が地域経済と結びつき、村に仕事や人を呼び込む仕組みが実現されていることを学びました。

木造建築が単なる建物の手段でなく、地域の職人や産業と連動する持続可能な社会の基盤となることを実感しました。その後、ヒッティサウ村でマティアス・ベア氏の手掛ける学校建築群を見学し、地域木材の積極的な使用やローテク環境戦略、換気や冷暖房の工夫など、設備に頼らない省エネルギー設計の実践を体感しました。欧州では断熱・気密・パッシブデザイン・換気・空調システムなどの省エネルギー技術と、引き算による環境配慮の両立が進められていることを強く感じました。



15



16



17



18



19

15. 工務店でのパネル製造
16. 木造倉庫建築
17-19. ヒッティサウ村の学校建築群



20



21



22

20. OPENLY外観
21. OPENLYエントランスの土壁
22. 外壁のモックアップ

4日目 + スイス 2025年10月23日 (木)

カーボンポジティブ住宅OPENLYとブルーマー・レーマン社

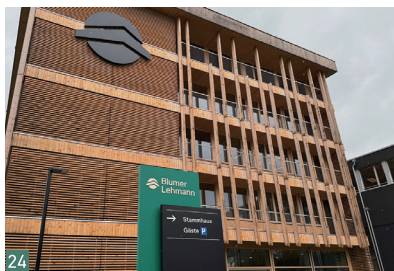
建設時と運用時のCO₂削減と循環型ものづくりの最先端を確認

この日からスイスでの視察が始まり、最初に向かったのは「OPENLY」という名の19世帯の集合住宅プロジェクトです。建設時と運用時の両面でCO₂排出を抑えることを目的とした先進的な取り組みであり、建物全体でCO₂を固定化する構成が実践されています。セメントや石油系建材を使わず、交通利便性の高い立地、コンパクトな形状、長寿命化など、CO₂削減に直結する設計が徹底されています。

住居からオフィスへの転用を可能にするため、窓のサイズや位置、天井高さ、配管の見せ方には一貫した法則があり、設備はセンターコアに集中させて変化に対応できる計画となっています。構造は木造ラメンに厚さ250mmほどのヘンブクリートを組み合わせて構成され、床は蓄熱性能を高めるために木床スラブと粘土を組み合わせています。必要箇所には耐火性能確保のためコンクリートを使用しつつ、

その内部にバイオ炭を骨材として採用することで、一般的なコンクリートより大きくCO₂削減を実現しています。これらの結果、従来建物比で50%のCO₂削減を達成し、太陽光発電と蓄電池を備えたプラスエネルギー建築の実例として成立しています。環境先進地域である欧州の中でもさらに進んだ事例に触れ、今後日本で実現するために必要な設計・施工体制や事業の枠組みについて考える機会となりました。午後はブルーマー・レーマン社を訪問。製材・プレカット・パネル・ユニット製作を一貫して行い、フリーフォーム加工も可能なリーディングカンパニーです。敷地内で木材が建材、さらにパネルやユニットに加工される全工程を見学しました。残材はペレットや発電燃料として活用され、工場全体のエネルギー需要の約15%を自給する循環型体制が印象的でした。

23



24



25

23. ブルーマー・レーマン社内観
24. ブルーマー・レーマン社外観
25. 木造パネル・ユニット化の様子

26-27. トーマス・
ビューラー社長による
レクチャー
28. HAGA社施工事例



5日目 + スイス 2025年10月24日（金）

HAGA社と近自然の森の視察

スイスの自然建材と森づくりから
持続可能な資源管理に触れる



29-31. 近自然の森

自然建材メーカーとして天然スイス漆喰や土壁などの建材を手掛ける「HAGA社」へ。創業者はスイスのパウビオロジー協会設立者の一人ということもあり、粘土や石灰などを主原料としたオーガニックな建材の製造・販売を行っています。製品説明時の「石膏ボードが主流だが、近年レームボード（粘土製のボード）の需要が伸びている」というお話が印象的で、欧州での環境配慮された製品への関心の高さを感じます。会社見学後は、HAGA社の製品を施工してお引き渡しをした住宅を見学させていただきました。見学先は川沿いに面した複数の住宅が長屋形式で建ち並んでいる中のひと区画で、建造されたのは1640年頃だそうです。川が近いことから湿気で傷んでいたため、内部は一度スケルトンにして改修されています。HAGA社の製品は透湿性に優れているため、このような現場にも適しています。外壁の断熱性能確保について、ここでは断熱・調湿性能を持つHAGA社の漆喰製品が室内側から施工されています。ここでは外断熱だと断熱厚み

を十分に確保できないという理由で、内付加断熱という判断がされています。スイスでは景観上の理由から外断熱が難しい地域、あるいは外断熱できない地域があります。自治体の景観管理を担う部門とエネルギーアドバイザーとの間では「景観とエネルギーのどちらを優先するのか」で衝突があるそうですが、そのパワーバランスはエネルギーアドバイザーの方が若干強いようで、スイスという国のエネルギー問題への意識の高さが伺えます。午後はヴィラ村の山林を訪れ、フォレストターのロルフ氏に案内いただきました。スイスでは、多種樹木の混交林をほぼ自然のまま管理し、最小限の間伐や収穫で生態系を維持しています。落葉の分解や微生物活動が樹木の成長に寄与する仕組みや、皆伐が土壌に与える影響も学びました。また、計画的に市場価値の高い樹種を育て、地域経済に生かすことで、自然と人の営みが両立する森づくりが実践されていることを体感しました。

エコバウツアー 参加者の声

高岡様／愛媛県

過去に何度もパッシブハウスなどの建物を視察して10数年前と比べるとものすごく進化しているのを感じました。先進国と言われている日本が途上国のような気がしてなりません。

日本もこれから追いついていかねばならないと思いますが資材高騰で安価な石油製品で出来た商品を使って建てられる建物が今以上に増え化学物質過敏症などに悩まされる方も増えてくるのが心配です。公共の建物などが率先して高性能+自然素材を使って人にも地球にも優しい建物がお手本となることを願っています。

窪崎様／東京都

ケーニヒさん、カウフマンさん、そしてロルフさんの大変すばらしいレクチャーを惜しみなくうかがえたことが何より素晴らしかったです。他ではまずありえないラインナップだと思います。そしてすべてにおいて、滝川さんの通訳+解説が素晴らしかったです。現地の政治的、経済的背景を理解したうえでの説明は秀逸。また、バスの中で、様々なレクチャーをしてくださったことも大変勉強になりました。帰国し、私の知り合い（業務でかかわっている自治体



の方) がロルフさんと親しいということを知りめっちゃくちゃ驚きましたが、そんな縁が繋がったことも大変有意義でした。イケダコーポレーションの加藤副社長がドイツと日本の違いを説明してくださったのがとても分かりやすかったです。全体を通じて、いきなり見学するより、全体的に社会的背景を滝川さんや副社長の説明により知れたことが、より深い理解につながったと感じています。

6 日目  スイス 2025年10月25日 (土)

Clay wood集合住宅の循環型建築

粘土と木を活用した再利用建材とアップサイクルの集合住宅を体感



32



33

32. 非焼成粘土壁
33. 各戸の機械室

最後の視察先は「Clay wood」という集合住宅プロジェクト。粘土 (Clay) と木 (Wood) を主な構成素材とし、建設時に発生するCO2排出量を最小限に抑えながら素材の再利用とアップサイクルを徹底的に実践しています。まず印象的だったのは、再利用建材の扱い方の巧みさです。解体建材の木材や鉄部材、リユース外装板金などを組み合わせつつ、全体に統一感のある美しい外観をつくり出しています。外壁の木仕上げやアップサイクルプラスチックによる防水材、土壁の内装、CLTパネルを無接着で用いた天井など、素材本来の呼吸を感じさせる構成が印象的です。構造的にも挑戦的で、一般的な基礎コンクリートを使用せず再利用杭の上に建てられており、廃棄物を出さず次に再利用できる思想が設計の細部まで浸透しています。エネルギー面では、リユース太陽光パネルで5世帯分の電力を賄い、共用カーシェアEVを蓄電池として活用しています。住民が自然とサステナブルな暮らし方を共有できる仕組みも整っています。案内したスタッフは強い使命感を持ち、「次世代の建築の標準にしたい」と語り、経営面でも別案件で利益を確保し、収益を実験的プロジェクトに投じる仕組みを示していました。素材、構法、エネルギー、経営を“未来へ引き継ぐ”視点で統合する姿勢は、これからの建築の方向性を示しており、日本でも挑戦できる可能性を感じました。



34



35



36



37

34. Clay wood外観
35. リユース太陽光パネル
36. リサイクル板金
37. スタッフによる会社説明

野尻様／長野県

今回初めて参加させていただきました。イケダコーポレーションにはシュタイコゼルで大変お世話になっておりましたので、今回、営業のお二人にご挨拶することができて良かったです。ツアー中は体調面でもサポートしていただき、大変感謝しております。本当にありがとうございました。ツアーに関しては、これ以上ないほどの充実の9日間で大変満足しております。二酸化炭素排出量を抑えるための設計方法や施工方法、森の生態系や土壌環境に配慮した林業の在り方など、弊社でも実践したい内容が沢山ありました。さらに日本の実態とドイツ・オーストリア・スイスの実態を比較することができたのも大変有意義でした。添乗員さまはじめ、現地の滝川さま、参加者の皆さまにも感謝申し上げます。

まとめ



今回のエコバウ建築ツアーを通して感じたのは、断熱性能の確保はもはや当然のこととして、その先に「建築をどのように環境の循環の中に位置づけるか」が問われているということでした。欧州では、住環境への配慮から生まれた自然循環素材の見直しが進み、木や土、石灰、麻などの素材が、再び建築の主役として使われはじめています。これらは心地よさをもたらすだけでなく、建設時のCO2排出量、つまりエンボディド・カーボン減らす具体的な方法として、社会の仕組みの中に根づきつつあります。素材の見直しは単なる流行

ではなく、建築の考え方そのものを見つめ直す動きでもあります。そして、その根底に流れていたのが「人と自然が調和して生きる」というバウビオロギーの思想でした。時代がようやくこの考え方に追いつき、建築が“循環する文化”として再び息を吹き返しているように感じます。日本でも、気候や風土、地域の素材や職人の技といった文脈を大切にしながら、こうした思想をどう形にしていけるかが問われています。今回の旅で得た多くの学びを、日々の設計活動を通じて少しずつ地域に還元していきたいと思います。

ご報告

2025年日本国際博覧会に出店したスシロー未来型万博店に木繊維断熱材シュタイコが採用



出店者：株式会社FOOD & LIFE COMPANIES

クリエイティブディレクション／

演出・コンテンツプロデュース：株式会社丹青社

コンセプト：「まわるすしは、つづくすしへ。—すし屋の未来2050—」

株式会社Eee works 一級建築士事務所の建築設計による2025年日本国際博覧会の「スシロー未来型万博店」に、木繊維断熱材シュタイコが採用されました。夏の高温環境下で屋根が強い日射を受け続ける条件を踏まえ、熱をためにくい特性を持つ木繊維断熱材の吹き込み工法が選ばれたものです。万博会場という厳しい環境で、木繊維断熱材シュタイコが建物の快適性向上に寄与した事例となりました。

ご報告

ビッグセミナー2025 “断熱と蓄熱で進化する木質建築”

木質建築の専門家たちによるBig Seminar2025 “断熱と蓄熱で進化する木質建築” が開催されました。会場は満員御礼、オンライン参加者も200名に迫る大盛況となりました。

本セミナーでは、資源・環境・快適性を軸に、木質建築のさらなる可能性を探りました。コストと熱の伝わり方は、考える順序を示しながら説明し、木繊維断熱材は数値だけでなく成り立ちから理解できる内容としました。さらに、WUFI解析を用いて数値では見えにくい木繊維断熱材の強みも示しました。広い視点と現場につながる内容を合わせた構成により、理解しやすい時間となりました。

2025年9月25日(木)

@東京



アーカイブ
配信中!

当日ご来場・オンラインにご参加いただけなかった方にとって、見逃せない内容となっております。ぜひこの機会にご視聴ください。
アーカイブのお申し込みはこちらから —>



ご報告

リフォーム産業フェア 2025

2025年9月17日、18日 @東京

東京ビッグサイトにて開催された「リフォーム産業フェア2025」にて木繊維断熱材「シュタイコ」と、ドイツの自然塗料「レイノス天然塗料」を展示しました。

18日には、「木をつかった高単価マンションリノベ セミナー」を実施し、40名を超える参加がありました。

セミナー終了後には、参加者に向けてブースで改めて木繊維断熱材シュタイコの紹介を行い、理解を深めていただく機会となりました。



ご報告

木工機械展 2025

2025年10月2日～4日 @名古屋

ポートメッセなごでで開催された「日本木工機械展2025（通称：木機展）」に出展し、弊社ブースは木工・家具・建具の専門家から高い関心を集めました。体験コーナーでは2種の塗料を試せるようにし、クリア仕上げが好評でした。ドイツ本国の技術講師による講演も行われ、レイノス天然塗料ならではの技術力と美しい仕上がりを実感いただく場となりました。

